九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

Performing Whiteness: Racial Representations in Selected Works of William Faulkner

松下, 紗耶

https://hdl.handle.net/2324/7182269

出版情報：Kyushu University, 2023, 博士（文学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：

（様式６－２）

氏　　名	松下　紗耶
論　文	Performing Whiteness: Racial Representations in Selected Works of William Faulkner （「白さを演じる―ウィリアム・フォークナー作品における人種表象）」
論文調査委員	主　査　九州大学　准教授　高野　泰志 副　査　九州大学　教授　鵜飼　信光 副　査　九州大学　教授　髙木　信宏 副　査　九州大学　名誉教授　小谷　耕二

論　文　審　査　の　結　果　の　要　旨

本論文はフォークナーの主要作品を扱い、白人が白人らしくふるまおうとする行為の表象を取り上げてそのパフォーマンス性に注目した論文である。これまでの人種研究は黒人をはじめとする異人種表象を中心に据えることが主流であったが、本論文は黒人という人種的枠組みが恣意的に構築されたものであることを前提に、白人という人種的枠組みもまた恣意的な枠組みたらざるを得ず、当時の白人が自分の白人性を強く主張するために白人性のパフォーマンスを強制されていたことを問題視する。たんに南部白人の人種差別的なふるまいの表象としてしか見られなかった描写を、他者を人種的他者とみなすことで自分の「白人らしさ」を担保する行為であると看破し、それが人種的不安に起因する葛藤の表れと見るのである。そしてフォークナーがそれをいかに描いたかに光を当てており、そういう意味で非常に独創的な論文であるといえる。

第一章では「乾燥の九月」を扱っている。この作品は白人女性をレイプしたと言われる黒人に対するリンチ行為を描いているが、そのリンチを主導するマクレンドンの姿にはアイルランド系白人の抱える人種的不安がみられることが指摘される。またレイプされたとされるミニー・クーパーもまた、南部白人女性に求められる役割を演じている側面が強調される。第二章の『八月の光』論では、これまでは主人公ジョー・クリスマスの人種の曖昧性に関心が集まっていたが、ここではクリスマスを取り巻く南部白人男性やクリスマスに殺害されるジョアナ・バーデンの人種性とその不安に注目している。第三章は『アブサロム、アブサロム』を扱っているが、主人公トマス・サトペンの野望を南部白人性獲得のためのパフォーマンスとみなしている。以上のように本論文の前半では、白人というカテゴリーが有色人種のような「属性」のない「空白のカテゴリー」であることに基づいて、フォークナーが白人種の人種化を試みていたことを明らかにしている。

第三章後半ではクエンティン・コンプソンの語りを取り上げ、黒人女性との個人的体験が人種混交への恐怖を生んでいることを指摘し、第四章では『行け、モーゼ』でこれまで批評の注目を浴びてこなかったロス・エドモンズに注目した上で、その人種的不安と黒人への欲望を暴き出す。第五章ではこれまでフォークナー研究ではあまり重視されることのなかった『墓地への侵入者』を扱い、白人殺害の冤罪を着せられた黒人を救うというチック・マリソンの行為を取り上げて、そこから作者フォークナー自身の人種的葛藤とともに自己批判的な姿勢がみられることを明らかにしている。

以上のように、フォークナーの主要作品を年代順に取り上げることによって、本論文はフォークナーの白人性に対する革新的な洞察を見出し、生涯にわたって白人の人種的不安と葛藤をとりあげ続けた作家であることを描き出しており、フォークナー研究に新たな視点をもたらす内容であると言えるだろう。よって、本調査委員会は、本論文を提出した学位申請者が、博士（文学）の学位を授与され

るに十分な能力を持つと認めるものである。